

近代尚家日記にあらわれる丁子風炉について

倉成 多郎

はじめに

丁子風炉とは、『日本陶磁大辞典』（角川書店 2002 年）では「室内の防臭や湿度調整のために香料の丁子を煎じた風炉。銅・鉄・陶磁器のものがある。形は丸く、上に土釜や土瓶を載せる。前方中央に火口、後方に風通しがある。」と説明される。

丁子風炉は 17 世紀に成立したと考えられ、鹿児島以北の日本および琉球において制作され利用されたものである。日本または琉球を起源とすると予想するが、中国での使用例については現時点において確認できていないため、その成立時期や伝播の形態などは不確定であり今後の課題としたい。

2017 年に尚家から那覇市歴史博物館に追加寄贈された 258 点の資料は、文書史料を中心とし内 41 点は国宝に指定された。国宝に指定される資料は尚泰が亡くなった 1901 年以前のものであり、1902 年以降の近代文書については桜澤誠と那覇市歴史博物館によって整理公開が随時行われている。同資料中の近代期の「尚家日記」の記述によると、東京尚家邸では 1915 年まで、正月等の座敷飾りににおいて丁子風炉が飾られていた。

この「尚家日記」とは、1903 年から途中欠落がありつつも 1947 年まで、継続して記入された家政日記であり、同じく寄贈された「庶務書類綴」と合わせて、近代期の侯爵家・尚家の交流や実務、沖縄との関係などを知る重要な資料である。筆者や年代によるその性格の変化などについて、今後の研究が進むことが期待される。

本稿では、旧国王家であり、さらに侯爵家でもある尚家が、近代華族制度の中で、琉球王国時代の遺風を残しつつ、徐々に変化を受け入れていく一例として丁子風炉に注目する。琉球王国時代の首里城から近代の東京尚家邸まで、丁子風炉が室内装飾として独自に発達し使用された点を指摘し、琉球王国時代の美術工芸の中での丁子風炉の重要性を述べたい。さらに、1915 年の尚昌の宮内省式武官就任を契機に 1916 年以降の座敷飾りが“日本風”に変容していくことを確認していく。琉球処分、東京移転以降の旧国王家・尚家には、政治的・経済的・人的に様々な変化が起こるが、その変化は室内装飾という文化的側面にまで及ぶことを指摘し、近代日本において儀礼が普及する様態の一端を示していきたい。

丁子風炉について

丁子風炉とは、香料の丁子を煎じるための風炉であるが、先行研究がほとんどない。CiNii においても「丁子風炉」の検索結果はゼロ件、風炉の炉の字に複数のバリエーションがあるため「丁

子風」の3文字で検索してもゼロ件となる。その成立年代や編年、産地、さらには使用方法においてが明確ではなく、古美術にまつわるエッセーなどに記録が残るのみである。なお、本稿では表記は「丁子風炉」で統一をした。ただし、原資料中の表記はそのままとしている。

先行研究がほとんどない中、佐藤孝が現在積極的に調査を進め『香料産業新聞』に毎年報告を執筆している¹。本稿も佐藤の学恩に浴することが大きく、共著といってもいいほど多くの助言をいただき成立している。

丁子風炉とは図1で示した「擬宝珠型丁子風炉」（壺屋焼・沖縄県立博物館・美術館蔵）のとおりである。下に炉があり灰を敷き詰め着火した炭を置く。そのうえに水と丁子をいれた釜をかけ過熱して香りを出す。形状はいくつかパターンがあり「擬宝珠型丁子風炉」のような円錐形タイプ、図2「白薩摩丁子風炉」（薩摩焼・那覇市立壺屋焼物博物館蔵）のように炉をたつぷりととり、球形の釜を付属させるもの、図3「赤絵紅葉文風炉」（壺屋焼・那覇市歴史博物館蔵・国宝）のように下部の炉が円筒のものなどである。

近代尚家日記に見る丁子風炉の使用例

資料1は、「尚家日記」1903(明治36)年元旦の記述の一部である。この年は、1901年に旧国王・尚泰(1843-1901)は亡くなり、尚典(1864-1920)が当主となり2年目である。

尚家邸ではたらく監督等の人々が年頭のあいさつを述べ、新御殿広間において、尚典の長男・尚昌(1888-1923)以下子息たち、さらには監督等の家臣団が「御先祖」を遥拝する。尚昌が千餅を食べ、以下子息家臣までそれを食べ、続いて「新御殿御広間装飾左ノ通」として次の記述が続く。

一 新御殿御広間装飾左ノ通

- 一 御広間 敷物紅毛布
- 一 御床 軸物 活花
- 一 御床前 中央卓上 薫物 / 香炉 / 立壺 全下 活花
- 一 御床南表棚 上 置物 下 丁子風呂

御床南表棚の下に「丁子風呂」が設置されたことがわかる。御床南表棚の下に丁子風炉が設置されるという記述は、1905年以外、1915年まで尚家日記に記述される。(別表1を参照。)この時、どのような丁子風炉が置かれたかについては、1935(昭和10)年に比嘉朝健が『陶器講座』に寄稿した「琉球の陶器」の中に尚侯爵家蔵とされる琉球瀬戸写手炉(図4)と琉球焼古薩摩写丁子風炉(図5)の二つの写真が掲載されており、そのいずれかではないかと予想される。

丁子風炉の利用例は、「政子様御婚礼日記」(1909年)、「尚光様御婚礼日記」(1914年)においても確認できる。「政子様御婚礼日記」は、尚典の娘・政子が漠那憲和と結婚した際の記録である。新御殿御広間の飾りつけの記録があり(図6)、狩野古信の寿老人と夫婦鶴の三幅対の軸物が飾られ、書院に「丁子風呂」と「暖炉」が設置されると記述される。同日記会場図によると(図7)、床の上手にある一角に「丁子風呂」と「ストーブ」という記述があり、この一角が庭側に張り出

した付書院だったのだと考えられる。1914年の尚光と米原福子との婚礼日記にいても、書院に丁子風炉がおかれたことが確認できる。

琉球王国時代の丁子風炉の使用例

丁子風炉の使用は、18世紀成立の「御座飾帳」（沖縄県立博物館・美術館蔵）でも確認でき、首里王府を中心とする近世琉球社会では室内装飾において丁子風炉に対して特定の位置づけが行われていたことがわかる。

「御座飾帳」については、渡名喜明の報告がある²。「御座飾帳」は楮紙24枚からなる、縦25.1センチ、横19.2センチで袋とじとなっている。筆者は公事帳調部方で、在番奉行及び付役の衆を招請した際の南殿、書院、御鎖之間などの座敷飾り、床飾りの記録である。1790年から1793年まで、7回分の記録がある。

「乾隆五十五年庚戌御奉行河野外記様御役、衆御首途御招請之御時」（資料2）では南風御殿（南殿）、ひすきの内、御右筆座に続いて、「御取付之間」が紹介され「一 北表高敷之壁本御役、衆刀掛居 一同所北表壁本丁子風呂居」と丁子風炉が設置されたことがわかる。この「御取付之間」が首里城のどこに該当するかについては、詳細がわからず今後の検討課題としたい。「御取付之間」は、おそらく御役役衆のための刀掛がおかれてあるということから、国王と対面する聖域に入る手前のバッファの部分、緩衝地帯のひとつであろうと推測できる。

「御座飾帳」では、7回分の記録のうち5回に「御取付之間」で丁子風炉が利用されている。その5回は着任、退任のあいさつであり、使われていない2回は、暑気見舞いと寒気見舞いである。おそらく、対面の内容に応じてランク分けがなされ、そのランクに応じて場のしつらえが作られたと考えられる。丁子風炉が利用されるのは着任、退任のあいさつであり、比較的ランクが上位に位置すると推測する。

近世琉球王国では、儀礼の場で丁子風炉を使用すること、あるいは丁子の香りがすることは、儀礼にのっとった行為であり、丁子風炉は儀式の場を装飾するものとして比較的高い位置を占めていたということが推測できる。陶工技術者である仲宗根喜元を祖とする「珠姓家譜」によれば、1737年に仲宗根喜元が御書院用の器具として「大花瓶」「大丁子風呂」「御茶入」「御天目」を作り、さらに「御濃茶御茶碗御花入」も作り内府へ献上している。丁子風呂の作成が功績として記録されるとともに、丁子風呂が花瓶や茶入、天目碗という茶道具とともに併記されることも、丁子風呂の低くない位置づけを示すものと考えられる。現在、琉球王国時代に遡る丁子風炉は、沖縄県立博物館・美術館、九州国立博物館、美ら島財団などに収蔵されているが、決して数は多くなく、10点程度であろう。沖縄の陶芸において丁子風炉は首里王府や上級士族に提供された上級品として位置づけられる。それ故、琉球産陶製丁子風炉は近世琉球美術工芸史の中で、王城の荘厳を担った重要な作例として今後一層注目し、編年など研究を進める必要がある。

近代沖縄における丁子風炉の使用例

正月に丁子風炉を使用する事例は、近代においても旧首里系士族や辻において確認できる。宮

里朝光は「首里の正月」というエッセーに以下のように記している。

①トウシヌユル(年夜) トウシヌユル(大晦日)には、大掃除をして位牌壇やフィヌカン(火之神)を清め、ウカリーカビ(黄赤紙)を位牌壇には二組、火之神には三組を供え、ウチャヌク(大中小重ねた餅)、デーデー(橙)やシークワシャー(小蜜柑)を供える。団子を道具類にも置いて年とらすという。ウェンチュ(鼠)のために天井や桁など置いて、「ウスメー、ハーメー、トウシトゥリヨウ」という。庶民は、団子の代わりにシークワシャーを置く。ウカリーカビは、里之子家は白赤黄と重ね、筑登之家以下は白黄赤と重ねて供える。位牌壇の前に、三方にミジフィチ(水引。縁に五寸幅の眉を付けた水色の幕)を回したトーデー(ウトークンともいう唐卓)を置き、上にウトオール(灯籠)、ウクフワン(御籠飯)とウシジビン(御錫瓶)、ウコール(御香炉)、ウチャトウ(御茶湯)、ウサキ(御酒)、シンマーチ(芯松)を生けたハナイチ(花生)を供える。門や床の間、位牌壇や柱には、朱紙に書いたレン(聯)を貼った。ウクファンには米を盛り、上にタン(木炭)三本をクープ(昆布)で巻いて載せる。ウクファンがなければチョーバン(京升)などを使う。シンマーチは、芯が出るように葉先を水平に切る。春分を過ぎていればそのままだが、春分がまだであれば葉の切り口に米粉を付け、ユチカミトーン(雪を被っている)という。床の間には、「福祿寿」のカキムン(掛物)などを掛け、シンマーチを生け、チョージブル(丁字風炉)を置いて丁字之香りを部屋中に漂わした。

『地域研フォーラム』Vol. 5 2005 沖縄大学地域研究所

また1956年に、新崎先生著書出版記念会から発行された、新崎盛珍著『思出の沖縄』の32頁に、「丁子風炉」という記載がある。

私達の幼少の頃までは、お正月やお祝事のある日などに、床の間や違い棚などに置いて、丁子を滾(たぎ)らかして其の芳香を座敷中に漂はせる丁子風炉という物が有った。それは大きき西瓜程の、円つこい一種の風炉で、上に急須位の大的釜状の器を据(す)え、その器の内に適宜に丁子と水を入れて、それを煮立てるようにするのである。それは普通陶磁器で製(つく)られ、形状から言っても一寸面白く、単なる置物としても相当なもので、昔懐かしい物の一つであるが、この頃は好事家共の倉庫内に冷く收藏される単なる骨董品となつて了(おわ)つた。総じて丁子の香気は、けばけばしい芳香の発散するモダンな香水などとは異なり、謹ましやかな、温味の有る、床しい感じのするもので、ほのぼの匂ふ丁子の香りには、藍紙傘(婦人用傘)を翳(かざ)して蓮歩を運ぶ往年のと一と一小やあい小めーを聯想(れんそう)せしめるので有る。で、丁子は小さい布の袋に詰めてそれを簞笥(たんす)に蔵(し)まつた着物の間に挿入したものであつた。(後略)

1976年に時事通信社から発行された上原栄子著『辻の華くるわのおんなたち』の中でも丁子風炉の使用が記述される。遊郭の部屋の中で丁子風炉が使用され、床の間に置き、客をもてなすために、池坊や草月流の流儀で生けた花と一緒に使用されたという記述がある。更に、この著書には、丁子そのものにも触れた使用習慣が綴られている事も興味深い。

二つ部屋を持つことのできるお姐さんたちは、上の間を殿方接待用の部屋と定め、床の間や違い棚の置物、お花の生け方などで、部屋の主の心根を表わすようにしました。琉球式の花の生け方では松を生けるとときには松の葉と枝を一本一本固い糊でくっつけて生けますが、後には池の坊、草月流など、色々な流儀を好みによって習ってくるようになりました。床の間には香炉を置かずに、丁子風炉を置きました。上の小さい壺に香料と水を入れ、下の風炉の方に炭火を埋め、ほのかな匂いを部屋中にくゆらせました。

いま少し着物に匂いをつけたいと思うと、丁子とか白檀を布袋に包み込んで筆筒の隅に入れておりました。この自然の香料は、お姐さんたちが動くとはじめほのかに優しく匂いました。いつまでも長持ちするこの香料は、熱い沖縄の風土をやわらげるかのように匂ったものです。

これらの資料から、正月に丁子風炉をたくという行為は、近世琉球以来、近代にはいっても行われており、琉球王国の遺風を伝える正月儀礼の一つであったとすることができる。東京に移った尚家も、この伝統を引きつぎ東京尚家邸の正月飾りに丁子風炉を設置していたと考えられる。

日本文化での丁子風炉

次に、江戸、京都を中心とする日本文化圏では丁子風炉はどのように使われてきたかを見ていきたい。

そもそも丁子とは、南方原産の香辛料で、一般的にはクローブとして市販される。『大和本草』では、「丁香 本草二異名ヲ丁香ト云。故ニ日本ノ俗丁子ト云。(中略)夏月丁子ヲ風炉ニカケテ煎ズレバ香満室、且蚊ヲシリゾク。男子ハ夏月丁香ヲ佩、婦人ハ麝香ヲ帯ビテ汗臭ノケガレヲ去ルベシ」とあり、蚊をよける、あるいは汗のにおいを消す消臭作用など、強い独特の香りを生かした活用方法が紹介されている。

安藤綾信が2005年に出版した『徳川譜代大名 安藤家の伝承ごと 茶道・香道・礼法』（東洋出版 2005/1/1）でも丁子風炉についての記述がある。著者の安藤は、旧磐城平藩主第十六代当主。御家流茶道十六世宗家、安藤家御家流香道十一世家元、伊勢流礼法伝承者である。この著書の中で、1680年に江戸城二の丸で開かれた茶会の記録が載せられ、筆者による解説が掲載される。この茶会は四代将軍家綱が体調不良となり、その慰みのために酒井雅樂頭忠清が開いた茶会の記録で、田安德川家に伝わっていた記録を2003年に安藤がコピーを譲り受けたものである。記録中に山之御茶屋に匂釜が設置されたという記述があり、著者は次のように解説します。

匂釜とある。これは「丁子風炉」「丁子香炉」のことです。解りやすく申しますと、おちょうずの間（憚り、厠）の香炉です。

その丁子風炉についてももう少し記します。丁子風炉は客間や御座敷の床に用いることはありません。特徴としては江戸時代の陶器は古清水などにあり、カラフル（極彩色）で、形状も人目をひく奇抜なものが多く、しかも大変に美しい。余談ですが、地方の割烹旅館の座敷の床に置かれてあるのを見て苦笑した事を思い出します。

これには後日談がある。佐藤孝が著者の安藤綾信に尋ねて確認したところ、この1680年の茶会で使われた匂釜を直接丁子風炉と断定することはできず訂正したいと伝えられた。ただ、ここで確認しておきたいのは丁子風炉に対する日本文化圏の認識である。

サントリー美術館では、所蔵する18世紀の京焼「色絵家形丁子風炉」について「廁などで丁子（クローブ）の皮を煎じ、芳香で臭いを消すための道具である」と説明を行い³、また相馬市のHPでは所蔵する相馬駒焼丁子風炉について「2代田代清治右衛門作 藩主の手洗い場の匂い消しに用いたといわれています。」と書かれる⁴。

『角川茶道大辞典』には丁子風炉は掲載されず、茶道具として認識されていない。

筆者が複数の古美術商から聞いたゴシップは、店内の目立つ場所にきれいな丁子風炉を置いておき、それについて尋ねてきた客がいたらその客はものを知らない客なので相手にしないということをする古美術商がいたという逸話である。

室町後期に成立した『御飾記』は、琉球王国の御座飾帳の成立にも大きく影響を与えているが、この「御飾記」にも丁子風炉の記述はでてこない。『御飾記』、正式には『東山殿御飾記』は1523年に足利義政のために同朋衆相阿弥が書き記したもので、東山殿の会所、座敷の名称配置、床の間、違い棚の道具の飾り方が、図示解説されたもので、「君台観左右帳記」とともに書院造の構成や唐物を中心とした東山文化を窺う史料と言われる。

近世末には、丁子風炉とはいわば「便所の匂い消し」という認識が江戸・京都を中心とする日本文化圏では浸透しており、室内装飾、特に床飾りとして丁子風炉が使われることはないということになる。一方、丁子風炉を表の飾りに使う琉球王国の室内飾りは、独自性を持った琉球式室内飾りであるといえることができる。

すでに見た通り、東京尚家邸で1915年まで行われていた正月に床の間に丁子風炉を設置する座敷飾りが行われていた。これは、近世琉球における室内装飾との接続性が認められると指摘できる。

また、そこから大正4年まで東京尚家邸で行われていた各種の儀式についても近世琉球王国の遺風を残すものではないかと推測することが可能ではないかと考えられる。

例えば、1909（明治42）年の「政子様御婚礼日記」の中に出てくる次の記述である。

新御夫婦祖先霊位拝礼ノ事

新御夫婦同列新夫母堂先導ニテ霊前ニ跪座一拝ス新夫母堂霊水ヲ拝載シ新夫婦ノ額上ニ塗ルヲ三度ス

附此式漢那母堂ノ提案ニヨリテ附加ス水盛ノ古式ヲ移スモノトス水ハ寅卯ノ方角新垣氏水道栓ニ取ル

この吉方位から採取した霊水を額に塗るという行為は、沖縄で水盛（ミジミイ）、あるいはウビナディと呼ばれる婚姻儀礼の一つである。当初は式次第に入っていなかったが新郎側の母親から提案されて追加された。これを受け入れた尚家側もミジミイが何かを理解し、それを受け入れる精神的な土壌があったということであろう。1879年の琉球処分により尚家が東京に移った際、

尚家とともに沖縄から移った家扶や監督などの多くが、琉球王国時代の首里で経験した記憶をとどめているということの意味する。それ故、明治・大正期までの尚家日記に描かれる儀礼から、かつて首里城でおこなわれていた儀式儀礼の推測が可能なのではないかと考えられる。尚家の近代文書には大きな可能性を秘めているのである。

大正 5 年以降の尚家日記中の正月飾りの記述

1916（大正 5）年の尚家日記から、正月飾りの内容に丁子風炉が消え、尚家の正月飾りは質的に大きく変化する。

一 御広間ノ飾付

御床間 古信筆三幅対 中寿老人 左右夫婦鶴

活花 松竹梅 壺円

御床間二ハ鏡餅壺盛三方二黄赤白紙ヲ敷ク（五幣供）

蜜柑昆布勝栗木炭等壺盛三方二全上

御違棚 上絵巻物 下料（紙欠か）硯箱

丁子風炉が消え鏡餅、蜜柑、昆布、勝栗、木炭、絵巻物、料紙硯箱というアイテムが出現する。これは、単に丁子風炉がなくなったというだけでなく、質的に正月飾りが変質したといえる。1916 年以降の正月飾りが“日本風”に質的に変容したといえる。

そもそも鏡餅とは、餅を二重に重ねた正月飾りの一つであり、1695 年に出版された『本朝食鑑』に「大円塊に作って鏡の形に擬（なぞら）える」との記載があることから 17 世紀には現在の形で普及していた正月飾りである。少なくとも、1915 年までは東京尚家邸では行われてこなかった飾り付けであり、おそらく琉球王国時代の正月飾りにもなかったのではないかと考えられる。

以後、1926 年まで同様の記述がつづくが、徐々に記述の量が増え、アイテムが増えていく（資料 3）。これは、導入した新式の正月飾りが拡張、補強、整理されていく様子を伝えるものと考ええる。

この変質の契機として尚昌の英国からの帰国と、1915 年の尚昌の宮内省式武官就任が予想される。また尚昌の岳父が礼法の家柄である小笠原家・忠忱であることも尚家内部における儀礼の変化に影響を与えたのではないかと推測する。ゆるやかに尚家内部で世代交代が進んでいったのであろう。

尚昌は、首里で生まれたが 8 歳で上京している。1911 年にオックスフォード大学に留学し 1915 年に帰国。その年、式武官に就任し、また前小倉藩主小笠原家（伯爵家）から百子を妻として迎えている。尚昌はその後東京尚家邸に洋館を建築するなどしている。父・尚典は体調がすぐれず、帰国後の尚昌へ緩やかな世代交代が進んでいったと考えられる。

尚昌が就任した宮内省式武官とは、儀典関係を扱った太政官式部寮が 1884 年に宮内省式部職となり成立した職で、典式（祭典、儀式）、交際（国際親善の儀礼、外国人の謁見、接伴、慶弔）、翻訳、雅楽、狩猟をつかさどり式部長官が統率したものである。室内装飾・荘厳を含む儀礼への

精通が求められる職である。また、妻・百子の実家・前小倉藩主小笠原家は室町期以来礼法の家柄として知られる。近代の小笠原家は、一般に公開されていなかった武家儀礼・礼法を普及する方向に舵を切り始めたところであり、それは戦後小笠原礼法へと継承される。百子の父、小笠原忠忱は死去していたが百子を通して、日本的正月飾りが尚家にもたらされたとも予想できる。

本稿では、近代期に尚家の正月飾りが変化したことを報告するにとどめる。尚家のこの変化を、単に尚家内でおこった私的な変化としてのみとどめるべきかどうかは今後の検討課題である。大正期の立太子の礼や皇太子の結婚儀礼において、明治以降の儀式・儀礼の洗練化が進んだと指摘される。また国粋主義的傾向の高まりの中で一層の日本化が華族においても追及された可能性も指摘できるのではないか。これらを今後の課題としておきたい。

別表1 近代尚家日記：丁子風炉の使用例 『尚家日記』明治37年～大正4年

明治	37年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	
明治	38年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂ナシ	※活花ナシ造花大倉喜八郎ヨリ進上ノ等便宜御飾
明治	39年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	
明治	40年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	
明治	41年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	
明治	42年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	※御床 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
明治	42年	政子様御婚礼日記	書院 丁子風炉 暖炉	※床間 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
明治	43年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	※御床 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
明治	44年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	※御床 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
明治	45年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	※御床 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
大正	2年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	※御床 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
大正	3年	日記	御床南表棚 下 丁子風呂	※御床 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
大正	3年	尚光殿御婚礼日記	書院 丁子風炉	※床間 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人
大正	4年	日記	御床南表棚 下 夏雲石 丁子風呂	※御床 軸物 古信筆三幅対 鶴寿老人



(左) 図1

擬宝珠型丁子風炉 (19 世紀) 沖縄・壺屋焼

沖縄県立博物館・美術館蔵 (写真提供：沖縄県立博物館・美術館)

(右) 図2

白薩摩丁子風炉 (19 世紀) 鹿児島・薩摩焼 (苗代川系)

那覇市立壺屋焼物博物館蔵



図3

赤絵紅葉文風炉 (国宝) (19 世紀) 沖縄・壺屋焼 那覇市歴史博物館蔵

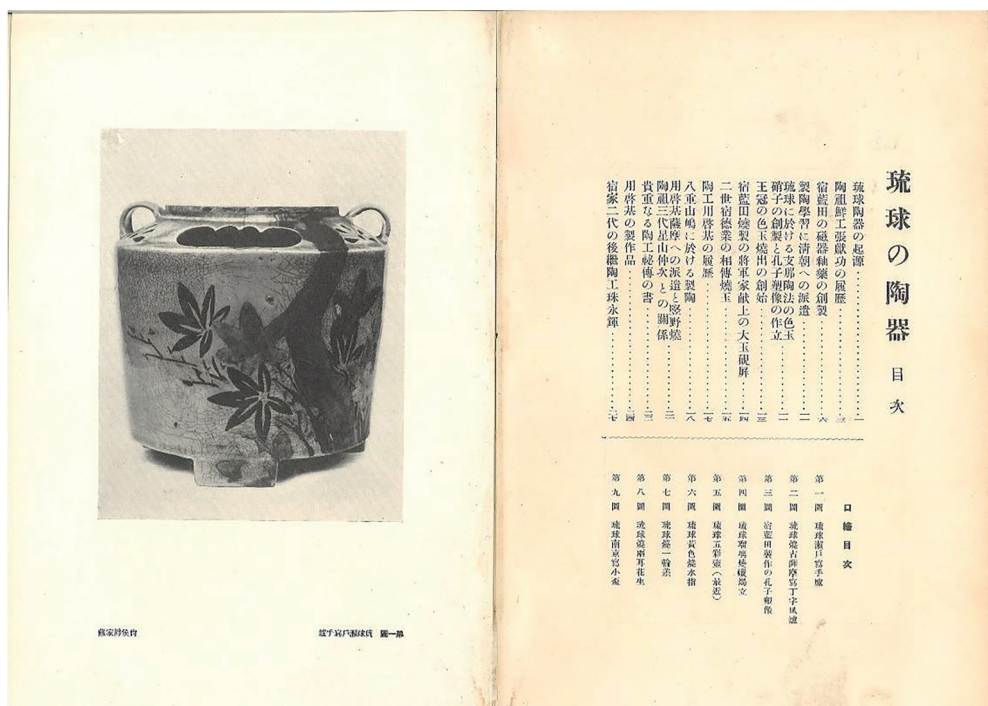


図4

比嘉朝健が「琉球の陶器」『陶器講座』で紹介する琉球瀬戸写手炉



図5

比嘉朝健が「琉球の陶器」『陶器講座』で紹介する琉球焼古薩摩写丁子風炉

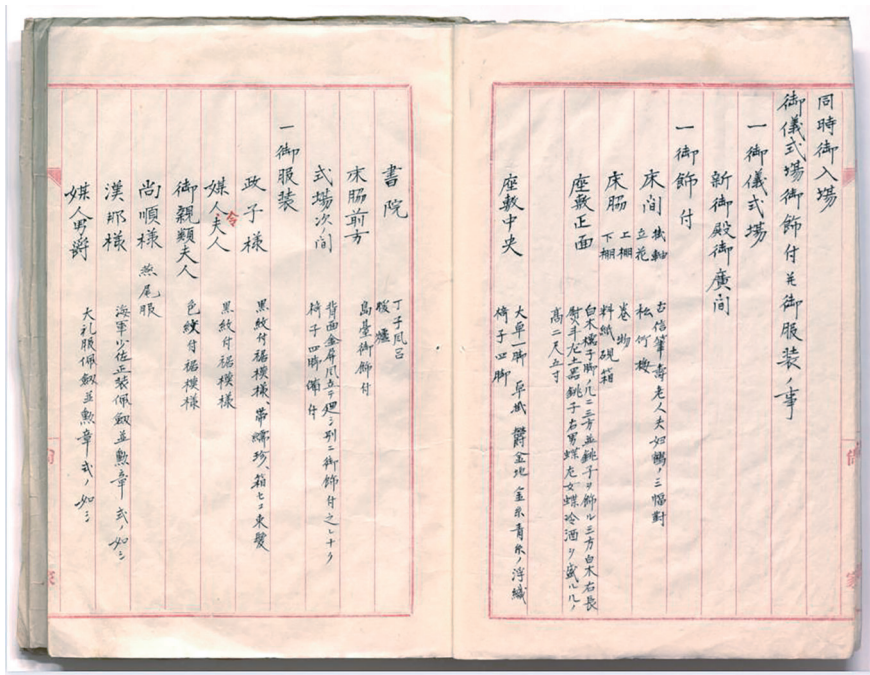


図6

政子様御婚礼日記 明治42年（1909年） 那覇市歴史博物館蔵
「書院 丁子風呂」の文字が見える

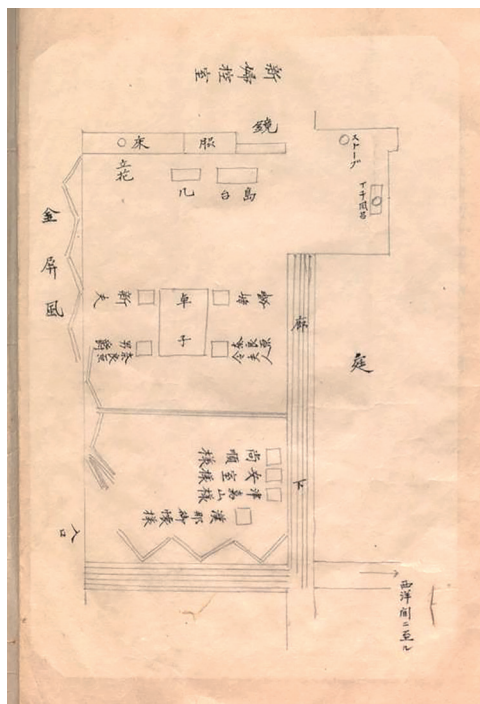


図7

政子様御婚礼日記 明治42年（1909年） 那覇市歴史博物館蔵
会場図 右上に「ストーブ」「丁子風呂」の文字が見える

【資料1】 近代尚家日記：丁子風炉の使用例 『尚家日記』明治36年

明治参拾六年一月一日

- 一 監督家扶家従以下御子部御附迄年首御祝詞被仰上候事
- 一 新御殿御広間ニ於テ
尚昌様御始御子部
御先祖御遥拝被遊候事
附監督家扶家従以下御子部御附迄御一同御礼拝
- 一 御遥拝相済ミ御同所ニ於テ
尚昌様御茶菓子（千餅）被召上尚秀様以
下御子部御惣中監督家扶迄被下候事
- 一 新御殿御広間裝飾左ノ通
 - 一 御広間 敷物紅毛布
 - 一 御床 軸物 活花
 - 一 御床前 中央卓上 薫物/香炉/立壺 全下 活花
 - 一 御床南表棚 上 置物 下 丁子風呂

【資料2】 近世琉球王国での丁子風炉の使用例：『御座飾帳』

乾隆五十五年庚戌御奉行河野外記様御役ゝ衆御首途御招請之御時
御座飾

南風御殿

- 一 御床 御掛物一幅西崖之筆山水之絵立花一瓶
- 一 御違棚
 - 南 堆朱御印龍盆ニ載せ
 - 中 御手鑑一折歌仙盆ニ載せ
 - 北 鉄拐仙
 - 下 銅之獅子
- ひすきの内 御葉茶壺
- 一 北表六尺縁六帖敷一番目壁本御奉行様御腰物掛居
御右筆座
- 一 台子一組 御茶具揃
御取付之間
- 一 北表高敷之壁本御役ゝ衆刀掛居
- 一 同所北表壁本丁子風呂居

（以下略）

出典：渡名喜明「資料紹介 「御書院御物帳」（沖縄県立博物館）「御座飾帳」（同）「御書院並南風御殿御床飾」『沖縄県立博物館紀要』第8号 1982

【資料3】大正5年以降の日記中の正月飾りの記述

【大正5年】

一 御広間ノ飾付

御床間 古信筆三幅対 中寿老人 左右夫婦鶴

活花 松竹梅 壺門

御床間ニハ鏡餅壺盛三方ニ黄赤白紙ヲ敷ク（五幣供）

蜜柑昆布勝栗木炭等壺盛三方ニ全上

御違棚 上絵巻物 下料（紙欠か）硯箱

【大正6年】

御遙拝式場ノ飾付

一 中央卓ノ上ニ

故従一位様ノ御写真御安置立花（水仙）香合

香著立等ヲ備フ

御床飾

一 鏡餅壺供三方黄赤紙ヲ敷キ昆布海老橙裏白等ヲ添フ

掛物 古信筆 夫婦鶴三幅対

活花 松竹梅

木炭三本ヲ昆布ニテ巻キ蜜柑五個勝栗五個等壺供^{三方}三方ニハ白米ヲ盛り黄赤白紙ヲ敷ク

一 床脇ニ上棚絵巻物 下料紙硯箱備付ク

【大正7年】（大正6年に同じ）

【大正8年】

御遙拝式場ノ飾付

一 中央卓上

立花（水仙）香合香著立等供フ

御床飾

一 鏡餅壺供三方（五殊塙）黄赤白紙ヲ敷キ昆布海老裏白讓葉根引松串柿

掛物 古信筆 夫婦鶴三幅対

活花 松竹梅

木炭三本ヲ昆布ニテ巻キ蜜柑五個勝栗五個等壺供三方三方ニハ白米ヲ盛り黄赤白紙ヲ敷ク

一 床脇 上棚 絵巻物 下料紙硯箱備付

【大正9年】

御遙拝式場飾付 洋館御客間

一 中央卓 立花（水仙） 御香炉 香合沈香
香著 灰押等供フ

御床飾

一 鏡餅壺供三方／壺斗式殊塙

黄赤白奉書ヲ敷キ昆布海老橙裏白讓葉根引松串柿等添フ

掛物 古信筆 夫婦鶴三幅対 活花 松竹梅

一 木炭三本ヲ昆布ニテ巻キ蜜柑五個勝五個等

壺供三方三方ニハ白米ヲ盛り黄赤白奉書ヲ敷キ

一 床脇 上棚 絵巻物 下 料紙硯函

若殿様御居間

一 鏡餅壺供五殊塙 掛物 雪舟筆 寿老人

活花

若奥様御居間

一 鏡餅餅五殊塙 掛物 鷹ノ図

若様御姫様御部屋

一 鏡餅壺供 五殊塙 掛物 探幽筆 寿老人

一 門松 本御門 代金参拾貳円也 通用門 全五円也

一 御玄関飾御倉前飾各御座敷輪掛ヲ御

飾

【大正 10 年】（前年尚典逝去につき正月飾り取りやめ）

【大正 11 年】

御遥拝式場飾付

一 中央卓 立花（水仙） 御香炉 御香合（沈香）

香著 灰押等供

中央卓ノ上ニハ御先代従二位様ノ御写真御安置

御床飾

一 鏡餅壺供 壺斗貳殊塙 三方

御三方ニハ黄赤白奉書ヲ敷ク

昆布海老橙裏白讓葉根引松串柿 等ヲ添フ

一 御三方壺供

御三方ニハ黄赤白奉書ヲ敷ク

木炭三本ヲ昆布ニテ巻キ蜜柑五個勝栗五個添フ

掛物 古信筆 夫婦鶴三幅対 活花

一 御床脇 上棚 絵巻物 水晶瓶 下 料紙硯函

松ノ間

一 掛物 華石筆 蓬萊山山水 活花

鏡餅壺供五殊塙

御居間

一 掛物 雪舟 寿老人 活花

鏡餅壺供五殊塙

御子様方御部屋

掛物 洞春 三幅対 活花

鏡餅壺供 五殊塙 活（「花」欠）

御写真棚

鏡餅壺供 五殊塙

一 門松 本御門 通用門

一 御玄関飾 御倉前飾 奥表共

各御座敷輪掛

【大正 12 年 13 年】（服喪のため正月飾り取りやめ）

【大正 14 年】

一 御遥拝式場飾付

中央卓 立花（水仙） 御香炉

御香合（沈香） 香著 灰押等供フ

御床飾

松の間御床

鏡餅壺供 三方 五殊取り

御三方ニハ黄赤白奉書ヲ敷ク

昆布海老橙裏白讓葉根引松串柿 根芋

御嘉例壺供 三方

御三方ニハ黄赤白奉書ヲ敷ク 白米ヲ盛り

木炭參本昆布ニテ卷キ蜜柑五個勝栗五個添フ

掛物 雪舟筆福祿寿 活花 松竹梅

御脇床 料紙硯箱

御居間

御先代正四位様御肖像 御花 菊 千梁

御奥二階 南側御座御床

掛物 華石筆蓬萊山山水 活花 松 千梁

同 東側御座御床

掛物 蓬萊山山水 活花 南天
御表応接間
掛物 探幽筆寿老人 活花
御子様御部屋
掛物 洞春筆三幅対 活花 松竹梅
鏡餅壺供 三方 五殊取

【参考文献】

- 佐藤孝「丁子風炉（呂）とは何か、その魅力について」『香料産業新聞』 2015 年 7 月 5 日号、15 日号
- 佐藤孝「沖縄の丁子風炉について」『同上』 2016 年 7 月 5 日号、15 日号
- 佐藤孝「薩摩の丁子風炉について」『同上』 2017 年 7 月 5 日号、15 日号
- 佐藤孝「その後の丁子風炉の調査研究について」『同上』 2019 年 7 月 5 日号、15 日号、25 日号、8 月 5 日号
- 佐藤孝「奄美大島（加計呂麻島）・喜界島に見られる丁子風炉について」『同上』 2020 年 7 月 5 日号、15 日号、25 日号、8 月 5 日号
- 佐藤孝「井伊家に見られる丁子風炉について」『同上』 2021 年 7 月 5 日号、15 日号、25 日号、8 月 5 日号
- 佐藤孝「松井家に見られる丁子風炉」『同上』 2022 年 7 月 5 日号、15 日号、25 日号、8 月 5 日号
- 渡名喜明「資料紹介「御書院御物帳」（沖縄県立博物館）「御座飾帳」（同）「御書院並南風御殿御床飾（同）」『沖縄県立博物館紀要』第 8 号 1982
- 沖縄県立博物館・美術館『琉球王国分遺産集積・再興事業報告書 第 2 巻 絵画・陶芸・金工編』2022
- 沖縄タイムス社『沖縄美術全集 1 陶芸』1989
- 那覇市立壺屋焼物博物館『一六一六年 琉球陶始四〇〇年』2016
- 宮里朝光「首里の正月」『地域研フォーラム』Vol. 5 沖縄大学地域研究所 2005
- 新崎盛珍著「思出の沖縄」新崎先生著書出版記念会 1956
- 上原栄子著「辻の華くるわのおんなたち」時事通信社 1976
- 安藤綾信『徳川譜代大名 安藤家の伝承ごと 茶道・香道・礼法』東洋出版 2005
- 比嘉朝健「琉球の陶器」『陶器講座』第二巻 雄山閣 1935
- 二木謙一『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館 1990（2 版）
- 多木浩二『天皇の肖像』岩波新書 1988
- 兵庫県立歴史博物館『特別展 狩野永納』1999
- 岡山県立美術館『開館記念展 岡山の絵画五〇〇年 雪舟から国吉まで』1988

-
- ¹ 佐藤 孝「丁子風炉（呂）とは何か、その魅力について」『香料産業新聞』2015年7月5日号、15日号
佐藤 孝「沖縄の丁子風炉について」『同上』2016年7月5日号、15日号
佐藤 孝「薩摩の丁子風炉について」『同上』2017年7月5日号、15日号
佐藤 孝「その後の丁子風炉の調査研究について」『同上』2019年7月5日号、15日号、25日号、8月5日号
佐藤 孝「奄美大島（加計呂麻島）・喜界島に見られる丁子風炉について」『同上』2020年7月5日号、15日号、25日号、8月5日号
佐藤 孝「井伊家に見られる丁子風炉について」『同上』2021年7月5日号、15日号、25日号、8月5日号
佐藤 孝「松井家に見られる丁子風炉」『同上』2022年7月5日号、15日号、25日号、8月5日号
- ² 渡名喜明「資料紹介「御書院御物帳」（沖縄県立博物館）「御座飾帳」（同）「御書院並南風御殿御床飾（同）」『沖縄県立博物館紀要』第8号 1982
- ³ サントリー美術館ホームページコレクションデータベース
<https://www.suntory.co.jp/sma/collection/data/detail?id=249>
- ⁴ 相馬市ホームページ デジタルミュージアム
https://www.city.soma.fukushima.jp/shinososhiki/shogaigakushuka/bunka/digital_museum/syuuzoukan/shiryoku/bijyutsu_kougei/komayaki/750.html